

ふつつつ。私は貴様に勝てるのだよ？　なら貴様の勝利は必然と導かれるのだ！

「なっ！　夏が来たのに水着を着るだつて!?　ふざけるな！　この私が勝てるわけないだろ！　故に！　孫氏の兵法を学ぶということである！」

お前、落ち着け。何で語尾にビックリマークをしかも頻発に付けるんじやい。

「じやい」

じやい。なので、今回もわけのわからない展開が貴女を待つ！

「いや、別に男性も読んでいるかもしれないぜよ？」

ぜよ。

「ぜよ」

しかしまあ、あなたもよく頑張りましたね。

「ええ、まさにそうではありますが故に」

なので、ご褒美です！

「うそお！　ホントに!?!」

嘘デース！

「そ、そんなあ。本編が始まるというにー！」
はじまりはじまりー。

というわけで、私は胸がきゅんとするの！（CV:若本）

「いろいろと展開が結構気持ち悪いと思うのは気のせいですか？」

大丈夫だ。気のせいではない。きつと私の言葉を以てして証明してやる。見て桶。私の言葉を信じなさい。

「嫌だ。嫌だ！　嘘だ！」

大丈夫。そのネタはもう使い果たされている。さんすう教室に行つてパーフェクトになつてこい。

「貴様もな。貴様が彩陽さんのネタを使つたということはもう、私が王者ということだ」
何を言っている。ははあ、まさか、花咲か？

「あのな。君に言いたいことはたつたの、あさきゆめみしではないのだよ。林檎酢と葡萄酢を混ざり合わせて川越店にお出でまして」

何を言っている。ゆかりんか！

「とりあえず、ある職業で会話をするのはやめよう」

そうだね。では、次のネタは？

「うーん。きつと、僕たちの将来を予想してしまった人の為に置いておこうと思うんだ」
どんなネタを提供してくれるの？　まぐろ？　マグロ？　とろびんちよう？

「貴様、私が王者だということは恐らく規定された世界の中で学んだと思う」

いや、もう、お話のわけわからなさはどこをツツコめと？ と叫んでいるのですよ。これ以上のはなかるうに。

「ふっふっふ。私のわけわからなさはおリコ水だ！」

なんだ、オリコ水って。

「だけど、その水を沢山の人に分けてあげたい気分でもあったのは気のせいではないの。だから——」

どうした、またいつもの展開か。そんな展開は私にだけしか残されないのだよ。

「きつと、私が君に全てを話した時に渡してしまったことが全てだったのかもしれない」

ああ、私の想いの全てが始まるけど。それでも、世界におまじないをかけたのはあまりよくなかったのかもしれない。

「そして全てが変わる。そして一つが無になる。それはまるで世界の全てが虚しいということにもつながっていくのかもしれない。だけど、それでも、それでも」

私は諦めるわけにはいかない。それは全てを護ると先祖から伝わる想いの全てなのだから。

「いずれ戦うときが来るだろう。そして私達はその全てに打ち勝つために」

歌いましょう。戦いましょう。宴を開きましょう。

「その戦いに勝ったときの為に——」

私は帰ってくる。必ず。

「だから」

あなたはここで待ってて。

「そして」

私達の最後で最初の夜が明けていった――。

はあ。

「どうしたの？」

いやね。ほんに困ったことがあんなねん。

「下手な関西弁。素人レヴェルみたいだね」

なに、そのヴィジュアル系バンドみたいな名前は。

「なんか、ありそうだね。ぞんびとかあるぐらいだからねえ」

因みに君はどんなヴィジュアル系バンドが好きなんだい？

「うーん、己龍とか？」

へえ。なかなか、良いんじゃないのか。

「因みに筆者は音楽は聴くけど、聴くしかできないのでどんなバンドが良いということがわからないので独断と偏見で選んでいることをご容赦願いたい」

へえ。なかなか、困ったことだね。

「でも、ナイトメアとかがもう大御所なんだろうね。あと、シドとか」

今のヴィジュアル系バンドってなんかいろんなよくわからない曲もあつたりと、聴いている人が人がいたら批判と苦情が殺到しそうなのであんまり触れたくない。

「しかもこれは物語の関係性が絶対的にない気もするのは気のせいかね？」

大丈夫だ！ 私はゾロとか好きだよ？

「それは某海賊漫画のあれですか？」

違いますよ？ でも、今の人で知っている人といんの？

「いないと思う。というか、著者は東京なんたらかんたらを知ってるぐらいです。あまり著作権がわからないので、一部だけを表示しました」

知っている人はなかなかコアだぜ！

「というか、まさか、ごさいませんがあるなんて知らなかったな」

なに、ごさいませんがあるって。

「僕もヴィジュアル系バンドを汲みたい！」

水？

「だって、僕の声は摩天楼オペラを超えるハイトーンボイスなんだもん！」

そんなに凄いの!? それだったら、基本的に売れるんじゃないやね？

「だけど、彼には一つの秘密があつた」

秘密、か。それは何なんだい？

「彼はよく、ギターを弾いているんだが、一人でいつも独自の曲を作っているんだよ。その曲の中に必ず▲マイナーが入っているんだ」

それは特定の人を指し示しているのカナ？

「その人は、顔を出してくれないんだ。だから君にお願いがあるんだ」

僕に出来ることがあるのなら、何でもしますよ」

「僕をその人の下へと連れて行ってほしいんだ」

どうして、ロメオ？ ダメよ？ 私はオメロに行かないといけないんだよ？

「それでも、僕は○コードを使わないといけないの」

明るい曲を作るんだから大丈夫だよ。だから、心配しないで。私がいる。

「サデイさん。僕は今から行きます。あなたがバンドを止めたときにどれだけの人が哀しんだかがわからなかった？」

大丈夫ですよ。彼らは満足したために止めたのよ？ ♫指定もそういうものだったんだから。

「これから、私達は行かないのイケナイから。共に行きましょう？」

そうですね。では、最後に問題を出してから旅に出ましょう。

「問題です」

この会話の中でホントに活動していた、もしくは活動しているヴィジュアル系バンドは幾つ

ありましたか？

いや、それってオチじゃないよね？

「うーん。でもねえ。手の平を触りたいおじいちゃんがいるから、僕はおじいちゃんの全てを知りたいのかもしれない」

いや、そんなことはない。

「しかしまあ、これからのことを考えるとねえ」

どうしましたか？ 私のことを考えるということはとても楽なのではないのですか？

「うーん。それでも、僕はやっていませんよ？」

何も言っていないせん。ネタがないんだ！

「じゃあ、はい。魚」

違う新鮮な方じゃない！

「じゃあ、はい。干し魚」

いや、だから、誰が種子島とか叫んだの。

「見事に違う方に話を逸らしたわね」

うーん。でもねえ、おじいさんとおる朝考えていたんですよ。

「何をだい？」

おじいさんはね、お尻が二つに割れたらしいの。とてもやばいよね？

「うん、やばい。あなたが小学生以下の発言しかできないという意味で」

あら、やだ、嬉しいわ。

「あれ、私褒めた？」

ならば、今から貴様に勝負を仕掛ける！ 覚悟はできているんだろうな？！

「ふふふ。この私に勝負を仕掛けるとは。いいだろう、覚悟は貴様こそ出来てるんだろうな！」
掛かってこい！

「そうはさせるか！」

え？

「え？ どうした？」

いや、あの。

「ん？ どうしました？」

普通、そういう時って、望むどころじゃないの？

「うーん。そうなの？」

そうでしょ。ていうかさ、それがとんでもないほど勘違いしてない？

「それがたとえ、私の心に響かないとしても。私にはいずれも世界を学んでいた時のことを思い出すな」

いや、言つてよ、望むところだつて。

「私の全てを知っている彼のところに行かなければならない。でも、星屑を見つめていた少年はどこにいたのだろうか」

おじいさん、おじいさん。

「二つの宣言句は少年の心を奮い立たせるには充分な力だつた」

どうしても、私とおじいちゃんは。

「この世界にやり尽くしたことがあるとしたら。私は彼に伝えるということとはもう過ぎ去つたあのことを思い出すということなのか」

でも、どうしても、私達の心に残された最後の力を。

「貴女に伝えたい。少女は笑つた。少女は泣いた。少女は怒つた。少女は喜んだ」

そして少女は彼が帰ってくるのを今でも楽しみに待っていた。

「且つて、勝負をすることにしていた少年の楽しそうな表情を」

思い出しながら――。

「いつか、私達の寂しさを失ってしまったのなら」

それでも、僕たちの優しさは変わらない。

「本当にありがとう。君が居るから、僕は生きていられる」

本当にありがとう。君が居たから、私は別れることができる。

「一つの出会いは、一つの別れを約束している」

そして、二人は同じ場所で同じ意味の言葉を発した。

「アリガトウ」

サヨナラ。

「それはどんな想いと意味を持っていたのか」

それでも、僕は。

「それでも私は」

いつかの約束の言葉を。

「今言おう」

掛かってこい！

「望むところだ」

その二人のその言葉は。

「もう交わされることのない、最後の」

言葉だった。

「そして、夜は明けていった——」

言葉が聞こえた場所に。

「二人はもう」

いなかった――。

「鳥の囀りが聞こえる」

そして朝が始まった。

私はね？ おじいちゃんの為に一肌脱ぎたいのだよ。

「そうなの？」

うん、おじいちゃんって大変なんだなあって思うの。

「それはおじいちゃんって思うわけではあるのかい？」

意味がわからないわよ。それだけ、朝目が覚めたら、林檎を食したいと思うのは当然だと思
うのは違うんだから。

「そうなのか！ 林檎はダメなのか！ なら、冬の林豪はダメなのか？」

林豪ってなに？ (笑)

「ルン豪ですよ」 (爆)

でも、ぴえんなんて今の人は平気で言うんだろうな。 (泣)

「聯合という言葉を知って！ 置け！」 (悲)

……あの。

「どうしたの？ やっぱり吾のサム氏はわかんなかった？」

いや、それもあるんだけど、ちよくちよく追加される何かは何？

「いやいや、そんなことはございません。事実には否定されることがよくあるということを認めていただければ」(驚)

それだよ！(怒)

「あんたも使っているじゃないか！ それは私のせいではない！」

私のものではなかったら、君のもの以外誰のものは御本に忠実だろうが！

「手から喉が出るほど欲しいのそんなことか！ 所詮貴様はその程度よ」

その程度以下なのが君だろ！ それは喉から手が出るほどだろ！

「まあいいじゃん」

いいのですかい？

「良いと言ったら良いのです。さあ、吾の為に行くのです」

どこに？

「幽世、常世、現世」

いや、遠いのでお駄賃ください。なんか、一生暮らせそうなほど。

「そんなお金は星屑にでも言って降らしてやりな！」

貴様、やはりその程度だったんだな！

「ふん。貴様と呼ばれる程度だとしても、このまま、帰れると思うな！」

思つてません。しかしまあ、貴女も大変だったのね。私としても言葉を残していこうと思つたのですかね。

「そのようなものは私の中には存在しないんだよ！」

ふん、貴様はやはりその程度だったんだな。このまま帰れると思うな。

「何故だ！ 私にはその力を捜していたのなら全てはわかるぜ！」
わかるぜ？

「私にはわかる。この力が魔の力を修復しているのだと。そしてこの全世界の一部を支配できるのだと！」

いや、全部支配しろよ。

「だがな、私はこの力の使い方を謝ってしまったのだよ」
漢字ミス乙。

「だから、部下も、恐らくは課長辺りまでは成長するだろうな」

なかなか、モダンでアーバンチックな魔王たちの世界ですね。現実社会の会社と同じな役職があるなんて。

「だが、このままでは対抗会社、勇者株式会社に乘っ取られてしまうかもしれない」
あらま、ライバル企業が出てきましたね。

「くそお、吾の力は大企業に成れないのか！」

もう、全てを吐露したよ。

「どうすれば、吾は平社員に給料を払えるのか？」

いや、もう、破産寸前ですか。

「大丈夫ですか？ 社、もとい魔王様！ 今近くにある金融会社が融資をしてくださるって」
あら大変。会社が破産寸前だけど、融資が出来るなんて。

「本当か！ ならば吾の力を使って、金融会社に確実に契約をさせてもらおう！」

担保があるんだろうという確実で安心な金融会社に社長自ら行くんですね、わかります。

「そして後日」

その会社は潰れましたとき。

「めでたし、めでたし」

因みに、その会社は普通のライバル企業に合併されたというカタチで終わりました。

さあ、今宵も宴なのだあ！

「宴なのだあ！」

だけどお読みなられた方はわかるだろう！ この道を進むと辿ってはいけない道に繋がっているのだと！

「知らん。だが私にはわかる。方法も保々も鳳凰も！」

知らん。意味わからん。言葉に尽くせない想いはいつも大切にしているからな！

「人はそれを意味不明と呼ぶのです」

ええー？ そんなわけないよ！ ラーメンは副次的な意味しか持たないんだから。

「ふふふ。貴様にはまだわからないようだな」

わかつているよ。貴様にはわかるわけがないということだけはわかつているがな。

「でも、いつまでも意味不明なことだということは貴様に証明してやろう！」

な、何を出す気だ……？

「移ろう季節の中で私は貴方と出会った」

何を言っているんだ……？

「之こそが貴様の真実だということに巡り逢うべきだ！」

な、ま、まさか！

「ふっふっふ。だから言っただろう？ 僕たちのラーメンは貴様如きが食することが出来ないということを！」

な、なんだってー！

「な、なんだってー！ はテンプレだったんですね」

いやあ、にしても貴様という単語が好きな方がそこにはいたんですねえ。

「貴様って本来はとてもお上品な言葉ですからねえ」

そうなの？

「想なのでありますが故に」

にしてもホントこの世には不可思議なことがたくさんありますね。

「たとえば？」

ラーメンの上にメンマを乗せたり、刻んだねぎをリズミカルに乗せていったり、もはや、おかしいとしか言いようがない、チャーシューを乗せることだったり。

「どこに不可思議が在るの？」

それはあの日、素晴らしく美味だった長ネギを包丁で刻んだ、まだ汗が滲む程の暑さの夏の陽のことだったのです。

「それが何の関係があんのよ」

知らないの？ まさかね、私がそのラーメンを作ったということは最早、疑いようなない事実です！

「それはあるアニメが関係している！」

だから、ラーメンセットを作らないといけないの。

「違うアニメに展開！」

びすずには御免と言っておいてくれ！

「あらま」

漢字で読めばアニメがわかるぞ！

「そして君にはラーメンには豆板醤を入れるということを伝えなければならない。教えてほしいだろ」

私は、わたしは――！

「泣く必要はない。最も君が最早、ラーメンを食することしかできないことは事実だがな」
必要のない事実はここにはいない。素直になることこそが全てなのだから。

「星屑を見ていた時、初めて思いました」

あの星屑のソテーは今でも思い出します。

「星屑は今でも輝いている。だから思わず、涙が零れてしまいました」
どうして、そんなにも星屑を見つめるの？

「そこには宝物があるからよ」

そうして彼女は仄かに笑った。私程度じゃ彼女と付き合うことはできないけど。

「でも、彼女を支えることはできる。だから、これからずっと一緒にいたいと思う」

そして、月日は流れ、笑顔になるようなことを続けていこうと思う。それはかけがえない日々の始まりだったのかもしれない。

「そして、彼女は」

ラーメンを作ってくれた。

「運命と宿命にありがとうを言いながら」

二人で笑いながら出会ったときに作ってくれた同じラーメンを食した。

「もちろん、美味しいと思うのは言わずもがな、と」

思った。

さてと、君には本当のことを言わなければならないようだな。

「どうしたの？」

スターにならないとは思わないか？

「どうしてもって言うんならこのスターを作るよ」

この？

「うん」

ええー。そんな酷いことする？ 普通。

「ど、どこがドラちゃんなのよ！ このドラちゃんはね、満願全席なんて事をしなさいと言ったの！」

酷い！ 私傷つかれた。

「誰に？ 決して回る運動会なんてしてないからね」

くそお、この私がここで終わるなんて考えてもなかったというのに！

「星屑は貴様だけだ。素晴らしき世界を教えなければならぬな」

知らない。だがな、私の星屑は市長制だ！

「ダメじゃん。というか、市んでしまうんですね」

隠しても無駄だ。そこにへそくりがあるんだろ？

「ふう。さあ、新しい旅に行くしかないな」

どこにだよ。

「これから、ドラちゃんが持つていた、欲しえもんを求めてにだよ」

漢字ミスなんておかしいわね。この子、本当に貴女の娘？

「そのようなことは貴様にはわかるまい。わかるんマイということにもなるよ」

舞ちゃん、一緒に桜ちゃんとおじさんしよ？

「誰だ！ 貴様、まさか舞ちゃんを信じているのか?!」

当たり前でしょ？ 桜ちゃんはいつもそんなこと言う。

「貴様！ 今日のホリデイをユーかに皿よ奈良田！」

この人、ちよつと頭がおかしいわね。

「そうだよ？ それがどうしたと言うんだ」

行きましよ。幽世の門という本買ったから」

「へえ。面白くなさそう。だから、その本買うね」

そうだな。

「でも今回のオチは何だろうね」

きつと、オチなんてないんだよ。

「あつてほしい。でも原稿用紙換算枚数にて表示をしてくれた助かる」

知らん！

「でも、舞ちゃんと桜ちゃんが一緒に生活していた頃のことを今でも思い出すわ」

え？

「舞ちゃんが必死に稼いだ時に桜ちゃんが一生懸命に家事をこなして、二人で生きていくんだ

！　　つて」

舞ちゃん。お願いがあるんだ。

「どうしたの？　桜ちゃん。今日は余裕あるよ」

私ね、今日から別の人をこの家に連れてこようかなって思っているの。

「え？」

だつて、ね。今日からはもう、私達の家はなくなるってわかっていると思うけど。でもその人がね、その人がね……」

「ちよつと待つて、ちよつと待つてよ。私達は一生懸命に二人で暮らしていこうって言ったじゃない！　それなのに、裏切るの!？」

舞はキッチンから持ってきた包丁で豆腐を切るように言葉を切った。

「ごめんね。もう、舞ちゃんとは一緒に暮らせないの。ごめんなさい！」

そっか。それなら、私は、貴女を信じるために別れないといけないのよ。

「うん、でも時々連絡はするから」

いや、そんなものは必要ないわ。

「そして私は包丁を見て微笑む」

貴女を一生私のものにする方法は簡単だわ。

「え？ どうしたの？ 料理でも作るの？」

そうよ。私が好きな、肉料理をね！

「え？ え？」

カットオ！

「はあ。やっぱりこの展開はちよつと怖すぎませんか？」

いいのよ。これぐらいのことをしないと目が肥えた視聴者様は驚いてくれないのよ、今の時代。

「でもねえ、桜ちゃんさあ、もつと怖いって思える表情を出さないと、監督が許してくれないよ？」

そっかあ、でも、俳優ってとても難しいんだね——。

はい！　ここまでご読了していただき、ありがとうございます！

「ありがとうございます！　ここからは後書き的なものだよ！」

いやあ、今回はちよつと諸事情的なものがないので短いよ。

「いや、諸事情がないんなら長くしろよ」

でも、やっぱり勢いを大切にするんならそういうことを言わないと。

「うーん、関係なくね？」

関係ないね。

「うん」

うん。

「とまあ、今回も色々わけのわからない展開になっていますが」

やっぱり著者的には結構愉しんで書いているから、それが伝わればなあと思いまする。

「る」

る。

「そういうのって結構重要だよね」

だね。自分が一番楽しんでいないと読者も愉しまないからね。

「そうだよね。って漢字ミス」

いや、いいんですよ。この地の文と会話文シリーズは色々とルールが崩壊しているから。

「そうですかい」

そうなんですよ。あ、あともう一個。

「え？ 何か特別なこととかあったつけ？」

最近近くのコンビニが潰れました。

「どうでもいいー」

いや、あの状態の店を見たら、ちょっと描写の為に入ったんだけど。

「いつ入ったんだよ」

潰れる二日前。

「そんで？」

いや、まさかの棚しかない食品コーナーとかは次の作品のネタに活かされるかな？ っと思

ったわけよ。

「それはまた違う方から攻めてきますね」

だから、感じました。

「何をだい？」

コンビニは結構頻発に商品補充をしているんだなあって。

「はい。今回はここで終わります。ホント買ってくださいる方はありがとうございます」

ちよつと、コンビニ授業は終わってないよ？

「作者冥利に尽きるのですが、もし、他の作品も楽しんでいただいているのなら、ありがとうございます！」

コンビニも大変だったなつてことを伝えてないよ？

「では、また次の作品でお会いしましょう！」

ちよつと！ 便利なコンビニー！

「それはいいんだよ！ ベシ」

ひ、酷いよ！ あたし、親にもぶたれことないのに！

「それではー！ー！」

コンビニーー！